

戦後に生まれて

グミと野いちご

千  
草  
子



はじめに	5
1 海渡りサンフランシスコに来てみれば 土手に咲く咲くイロマツヨイの花	9
2 冬の夜にケンケンと鳴く声を きつねと教えしわが祖父母よ	12
3 ミッドウェイ加賀は海に吞まれゆく その船底に吾が「父」います	16
4 枇杷の実のたわわに突る庭園が 火宅なりとは知りもせず	20
5 グミを食み野いちご摘んで歩くなり 楽しきかなやこども連隊	24
6 石垣のいちご摘みにとこどもらは 黙してあゆむ母屋の東	28
7 「しにました」泣き伏す男見つめつつ 「愛」というもの、あること知りき	33
8 「おかあさん」抱きつきしは妻夫木君 稽古では出さぬ子雀の強さよ	37
9 夕闇の迫り来るころ護王神社に灯が入りぬ こわくてこわくて走り抜く	41
10 カナダからはつかとバラのいい香り 角を曲がると私のクリスマス	45
11 京大の先生の家もようあつて ええ子にならば他人は言ふ	49
12 ふと見あくドームにしなう夏草は 青々青と生命を歌う	55
おわりに	62
あとがき	65



戦後間もなく生まれた少女が、平成のおわりに七十歳をむかえた。オールドミスではないが、結局こどもにめぐまれず、夫も先に逝ったので、そのようなものである。若き頃、カトリックの修道女になりたいと思った時期もあったから、今、在家シスターだと、勝手に考えている。

### はじめに

いつかはおとずれる。死というものを一方で深く受けとめつつ、一方では、このごろふと思ひ浮かぶ古き知人——いや、昔、出会った縁深き、浅き人々のことを偲んでいる。はかなくも既に亡き人もあるし、その時以後、一度も会わずじまいの人もある。あれ以降、どのような人生を送ったのであろう。その人が私の人生を知らないように、その人も戦後を懸命に生きたはず。時をさかのぼって、幸多かれと、祈る日々である。

偲ぶだけでは、ものたりなくなつた。中学・高校の私学教師で、一応国語科の教師であつたことに勇気を得て、エッセイなるものを書くことにした。あいにく、定年前後から症状の出始めた腱鞘炎のため、鉛筆やボールペンをにぎるのがきつい。そこ

で、不得手なパソコンでポチポチ打つことにした。

ところが、自分で驚いたことがある。それまで、そんなにひんばんに詠んでいたわけではないのに、文章より先にふつふつと、歌が湧き上がってくる。一過性のものだと、そのまま打ちつづけていたら、気がつくくと、十二章もの歌物語となっていた。

教師として作文教育をしてきた経験から、まずは書きたいままに書かせるのが得策であるので、自分に関しても、そのまま流していたら、あるところまで来てしまった感がある。

名付けて、「グミと野いちご」。太平洋戦争の影を色濃く引きずる母とともに、アメリカ人女性宣教師と十三年間暮らした京都の生活を、短歌に詠った昭和の記録である。

自分では、伝統的には歌の前に来ていた詞書を後にもつてきて、エッセイとして展開する新しい文学ジャンルであるなどと、気楽に考えている。

ドキュメントであるが、登場人物や地名など、プライバシーに関わりそうな部分は、適宜カモフラージュしている。もし、他人の目に触れたときを考慮したのである。自費出版することをちよっぴり考えている自分がかわいい。

最初から、それほど明確に意図したことではないが、結果として、私の京都に至るまでの、生い立ち、さらには、カナダにわたった祖母の物語も詠われるので、能の「夢幻能」の世界を現出させたような形となった。

このような文学形態で、宗派にこだわらず、亡くなった人の追悼が可能だということとは、長らく、国語教師をしてきた私には納得のいく実践であった。

プリントアウトしたものを厚紙に黒紐で綴じて読み返していると、この和歌エッセイは、一人の日本人少女の信仰の軌跡でもあり、心のさまざまな感情がいつ少女に芽ばえたかの記録にもなっている。それは、現在、六十代、七十代のまだ見ぬ戦後生まれの人たちと共有される心の軌跡でもあるのではという気がして来た。最終章は、戦後生まれの——戦争のもたらす貧しさと悲しみを幼いながらも自分たちの眼で見ることのできたみんなが持っている「世界平和への願い」に収斂されていったものである。

国語教師の時は、ジャンル分けして教えたが、今回の経験を通して、歌は特殊な文芸ではないと、言いたい。日本語の生来的にもつ五音節、七音節のつぶやきが、一つの形と成ったもの、したがって、人により、あるいは、同じ人でも、その時の息づかいでは、俳句となっても、かまわない。

同じことが、つむぐ文章の形態にも言える。「グミと野いちご」の章を終えたら、私の文章は、必ずしも、和歌を必要としなくなっていた。これも、またよし。何ごとにも自然の流れにまかすことにしよう。「野の花」の心である。



グミと野いちご 1

海渡りサンフランシスコに来てみれば

どて  
土手に咲く咲くイロマツヨイの花

長らく国語教師それも古文を専門としていた縁で、週一回、近くの公民館で文学講座を担当している。テーマは「源氏物語」である。戦争中、源氏物語どころではなかった母の願いで、二十年ほどかけて『源氏物語』の現代語訳を原稿用紙の上では完成させていたので、それを基に原文を手ほどきしている。

先日、受講生のお一人が、珍しい花をくださった。ご本人は、その名をご存じなかったが、別の受講生が「ダダチャじゃないかしら」とおっしゃった。

早速、家でダダチャを検索してみる。ダダチャは、俗称で、本当の名前は「ダデチア」、アメリカ西海岸、サンフランシスコからカナダへかけて海岸の砂地に自生すると言う。和名、イロマツヨイグサ。マツヨイグサ（宵待草とも）の一種らしい。昼間